

#### IV. 調整員会議アンケート結果

##### 1. 各会議について、いかがでしたか？

事 項	有益だった	や や 有益だった	普 通	悪かった	無 回 答
(1) 機材購送業務、現地調達について(調達部・機材課)	(14)	(18)	( 4)	( 0)	( 0)
(2) 機材供与実施計画書作成上の留意事項について	(13)	(13)	( 9)	( 0)	( 1)
(3) プロジェクト方式技術協力における専門家の役割について	(12)	(16)	( 6)	( 1)	( 1)
(4) 機材維持管理体制	( 9)	(14)	(12)	( 0)	( 1)
(5) 安全対策、緊急時の対応について	(16)	(14)	( 6)	( 0)	( 0)
(6) 各プロジェクトの成果品の交換について	( 2)	(12)	(17)	( 4)	( 1)
(7) 第1分科会「調整員業務マニュアル再考」について	(13)	(15)	( 8)	( 0)	( 0)
(8) 第2分科会「プロ基盤、中堅技術等」について	(11)	(16)	( 7)	( 0)	( 2)
(9) 第3分科会「プロジェクト内規の整備について」について	(17)	(12)	( 6)	( 0)	( 1)
(10) 第4分科会「プロジェクト開始期における調整員の業務について」について	(13)	(11)	(11)	( 0)	( 1)
(11) 調整員からの要望、疑問について	(13)	( 6)	(16)	( 0)	( 1)

2. 今回の会議では、調整員が主体的に参加するように、役割を分担してもらいましたが、いかがでしたか？

- ・良 (影山裕子)
- ・理想的と思う。(大原正裕)
- ・前もって、各テーマにつき整理しておくことができたので、会議中の時間の使い方も有効であったと感じる。(寺田伸子)
- ・よかったと思う。ただし、分科会のまとめに要する時間がかかり、担当の人は大変だったと思う。(国森恵子)
- ・私はシンガポールでの会議に出席したことがあったが、そのときに比べて、今回は非常によかったと思う。前回の印象では、JICA対調整員という感じが残ったが、今回は同じサイドに立って考えるというムードがあった。(森貞芳子)
- ・前回までがどのように行われたのかよく分からないが、次回以降もこのような形式の方が意見を言いやすい。(根岸左行)
- ・調整員が主体的に参加する方式は有意義であった。もともと調整員は主体性・積極性の強い人々なので、今後もこの方式をとったらよいと思う。(木田 洋)
- ・前回に比べ参加したとの実感があるのは進行・発表・書記という役割分担がはっきりしており、あらかじめ準備する内容がはっきりしていたからだと思う。(押川雄孝)
- ・ケーススタディーができ、よかったと思う。(原田 徹)
- ・前回のマレーシアでの会議より参加しているという実感はあった。(今村 甲)
- ・非常に良かったが、本部から資料が配布されたのが遅く、分科会時の意見の調整に苦労した。(伊藤良輔)
- ・明確なテーマが必要。準備期間が必要。役割の明確な分担。(田口正文)
- ・第1分科会では、スリ・ランカの調整員の方が出席できなかったことはありましたが、調整員全員が役割分担したことは、それぞれの人が真剣にテーマに取り組むために非常に有効であったと思う。ただ、「テーマ」としては、分科会討論で初めて考えたこともあり、準備不足を反省している。(山下哲雄)
- ・事前に、分科会の進行・発表・書記の役割分担ができていたので、自分のプロジェクトの資料を持ってこなかった。各プロジェクトでの成功、失敗した例を、役割に関係なく、所持していれば、そのとりまとめだけで立派な運用集になったと思う。(大高明夫)
- ・有益。ただ、参加する前の準備に時間をかけるのではなく、参加してから取りかかるようにすべきだ。つまり、事前に準備したものを発表し合うだけではあまり効果がない。参加者のグループがそろったら、そこからスタートすべきで、課題のピックアップ、そのプライオリティーも解決策の検討も、グループの中で実施すること大切。グループ作業の中から新しい

発想を生み出すことが大事!! 事前に答を用意してくると、それにこだわって新しいものが生まれにくいから。 (室井常正)

- ・調整員が抱える問題点について、調整員が主役となることによってより明確に、詳細に、情報を得ることができた(1~2回の会議と比べて)。 (清水芳洋)
- ・全体討論において、書記がどのようにまとめて、最終的にどうするのかというガイドラインが必要だったように感じた。 (正木幹生)
- ・良い。役割はより複数の人々で分けあった方が良いと思う。 (井田光春)
- ・会議に参加する意識を高め、かつ詳細なる部分の意見交換ができ有意義であった。  
(阿部吉夫)
- ・各人の要望に基づく役割分担を取り入れられたことはJICAとして珍しく、好ましいことと思う。 (正崎雄三)
- ・良かったと思う。欲をいえば(時間的には難しいか)他の分科会にも出席したかった。  
(小笠原壮一)
- ・赴任直後で忙しく、連絡・準備が十分できなくて申し訳なく感じている。勉強になった。  
(中野久雄)
- ・主体的に参加するためには、もっと調整員の意見を事前の段階で聞く必要がある。  
(榊 道彦)
- ・意見交換が活発に行われてよかった。 (高橋武彦)
- ・例えば、調整員によって構成される準備委員会を組織し、調整員を会議内容の企画に参加させる等、難しいかもしれないが、より一層主体的に参加する形になれば、より以上の成果が出るのでは? (松沢和浩)
- ・考える機会ができてよかった。 (宮坂 実)
- ・分科会の書記に当たり、一番楽ができると喜んでいましたが、甘かった。しかし、他のP/Jの調整員と共同で成果品を作成したのは、大変だったが有意義であった。パソコンを持ってくるべきだった。 (齊藤悦夫)
- ・大変よかったと思う。逆に、今まで本部側の進行で会議を行ってきたことの方が信じられない。調整員の要望にもあったが、非常にショートノーティスであった。通信事情の悪い国同士の電話・FAXのやりとりは困難なため、「前広」な、ノーティスをいただきたい。  
(島岡みぐさ)
- ・同じ分科会の他の人の情報がわからないので、なかなか状況が把握できなかった。プロフィール等を、もっと早く流したら良かったのではないかと。(会議の前に各赴任地へ送る等)  
(鈴木清美)
- ・最終的取りまとめはやはりJICAがした方が良いのではないかとの感じがした。  
(小櫃治郎)

- ・とても良かったと思う。ただし、前回（クアラルンプール）のときも、それぞれの気持ちは「主体的」であったと思う。（錦織 明）
- ・調整員が主体になれていい結果をまとめられたと思う。ただ、short notice だったので、資料作成にとまどってしまった。（井手 徹）
- ・良かったと思う。しかし、今回は準備期間が不十分だった。（石山由夫）
- ・良い企画だと思う。（木村健司）
- ・発想は素晴らしいが、取りまとめの段階の改善が必要だと思う。（丸田秀士）
- ・日常はルーティンワークに追われ、1つのテーマについてじっくり検討することができないので、今回のやり方は非常に有意義であった。（佐藤よし江）

### 3. 会議日程は長かったですか？

- ・適当（影山裕子）
- ・適当（大原正裕）
- ・ちょうど良い。（しかしこれ以上長いとつらい。）（寺田伸子）
- ・ちょうど良い。（国森恵子）
- ・ちょうど良いと思う。（森貞芳子）
- ・分科会に分かれての討論、まとめ、発表まで含めるとあまりに短い。（根岸左行）
- ・短かったと思う。（木田 洋）
- ・会議そのものは長くも短くもなしでちょうど良かった。自己紹介がプロフィールの形であらかじめ提出されているのは、こういう会議の出だしにお決まりの無駄が大いに省かれたように思う。また、「要望および本部見解」があらかじめ回答されていたのも、議事進行の効率化となった。（押川雄孝）
- ・適当だったと思う。（原田 徹）
- ・長くもなく短くもなく、こんなもんなのでは。（今村 甲）
- ・火曜～金曜の日程の方でよいのでは。（伊藤良輔）
- ・日程そのものは長かったと思うが、それだけの内容があったと思う。（山下哲雄）
- ・ちょうど良い。（大高明夫）
- ・短い。（室井常正）
- ・ちょうど良い。（清水芳洋）
- ・妥当と思う。（正木幹生）
- ・1週間程度で良いと思う。（井田光泰）
- ・分科会に十分時間をさいていただき、時間の配分も適当であった。（阿部吉夫）
- ・5日間は長くない。（正崎雄三）

- ・ 適当と思われる。 (小笠原壮一)
- ・ 長いという感じはしなかったが、期間中缶詰状態という印象であった。 (中野久雄)
- ・ あと2日ほしい内容であったが、妥当なところと思う。(内容が多すぎる)。 (榎 道彦)
- ・ 少し長かった。 (高橋武彦)
- ・ 適当であると思う。 (松沢和浩)
- ・ スケジュールを見て「長い」と思ったが、実際には適当な長さだった。 (宮坂 実)
- ・ あっというまに過ぎた感じ。しかし、個別打合せと分科会のとりまとめで、日中(夜は別)に出歩くほどの暇がまったくなかった。 (齊藤悦夫)
- ・ 長かった。しかし充実していたと思う。私も、その国(今回フィリピン)のプロジェクトを訪問して、問題点、工夫している点などを見て回るというアイデアに賛成である。百聞は一見にしかず、であると思う。 (島岡みくさ)
- ・ ちょうど良い。 (鈴木清美)
- ・ 適当と考える。 (小櫃治郎)
- ・ 2、3番と関連して考えると、より「主体的」で「活発」で、有意義な成果品を生み出す会議を目指すならば、日程はもっと長い方(もう2、3日)が良いのではないかと。  
(錦織 明)
- ・ 問題なし。 (井手 徹)
- ・ 良い。開催国の類似(プロジェクト)あるいは関連プロジェクトを訪問できれば、もっと良い。 (石山由夫)
- ・ 5日間というのは、多くも少なくもなく、適当だと思われる。 (木村健司)
- ・ 短すぎる。(話し合うべき内容と比較してという意味で) (丸田秀士)
- ・ 適当であった。 (佐藤よし江)

#### 4. その他、会議日程について意見があればお願いします。

- ・ もう少しゆとりがあれば、もっとよいと思う。 (寺田伸子)
- ・ せっかくフィリピンまでやってきたので、会議場を出たところの収穫もほしいと思う。  
(森貞芳子)
- ・ もう少し遅い時期が望ましい。(11月中旬) (根岸左行)
- ・ 議題が多すぎて頭の中を整理しきれないうらみがあった。議題を減らして、もう少し突っ込んだ、時間に追われない議論がしたかった。 (木田 洋)
- ・ プロジェクトサイト訪問を日程に入れていただければ幸甚である。 (原田 徹)
- ・ もう少し、会議日程に余裕を持たせ、プロジェクト現地視察を実施してもらいたい。  
(伊藤良輔)

- ・プロジェクト視察を組み込む。
- ・リーダーの参加（講師として）を考慮する。（田口正文）
- ・個別打合せの時間についてはプロジェクトの数の関係もあるため、すべてのプロジェクトに十分な時間をとることが難しいかと思うが、できれば分科会を少なくしてでも時間を取っていいかもしれない。（山下哲雄）
- ・もう少し余裕がほしい。2. で説明したように新しいグループができてからの作業開始だから、もう1日か1.5日はほしい。さらに、現地視察も入れるべきだ。（室井常正）
- ・開催場所付近のプロジェクト事務所を実際に訪問して、他の調整員の業務の現場を見るような時間を設けたらよいかと思う。
- ・完全に丸1日 free の日を設ける。（正木幹生）
- ・自分の関連する分野のプロジェクトサイトを視察する機会があれば、さらによいと思う。（井田光泰）
- ・リーダー会議（海外での実施の場合）のように、他のプロジェクトを視察する時間を設けてみてはどうだろうか。（正崎雄三）
- ・近郊プロジェクト視察（農業プロジェクト以外でも可）。（小笠原壮一）
- ・農業プロジェクトへの視察が日程に組み込まれると変化に富んだものになると思われる。
- ・農技協担当者との打合せ時間が不足していた（30分）。プロジェクト数が多いので、担当者2名程度を派遣すべきでは？（中野久雄）
- ・時間に余裕を持つ。（討議の時間等）
- ・4時には終了し、その日の反省ができるようにする。（榎 道彦）
- ・会議開催地のプロジェクトを一つ見学するよう、考えてよいのではないか。その場合、日程をもう1日くらい延ばすのが適当である。（高橋武彦）
- ・例えば、開催国におけるプロジェクトの視察等ができれば参考になると思う。（松沢和浩）
- ・会議そのものが目的ならば、開催場所をもう少し便利な場所にしてほしい。（マニラは少しはずれていて、航空便のつながりが悪い）  
例・バンコク、クアラルンプール、ジャカルタ、シンガポール（ホンコン）  
（宮坂 実）
- ・完全な Free time を半日ほど入れてほしかった。（齊藤悦夫）
- ・外務省の反対はあるだろうが、土・日移動は避けてほしい。帰任後等も休日なしで出勤せざるを得ない。なお、今回、ネパールの祝日3連休と重なったこともあるから、任国の祝日も考慮に入れてほしい。ネパールの休日は、土曜のみであり、祝日も年間10日ちょっとしかない。（井手 徹）

- ・任国の祝・祭日を考慮してほしい。ネパールは10月23日～25日まで祭日だった。家族サービスの機会を逃してしまった。（石山由夫）
- ・ノーマルな日程である。（木村健司）
- ・会議地到着・出発の日付が定められており、任国からの直行便があるにもかかわらず、金銭的にも不利な遠回りを強いられたことには疑問。空港出迎えの都合と聞いたが、出迎えを必要としない人もいるので、もう少し考えてほしい。（丸田秀士）
- ・今回の分科会形式のやり方の場合、もう少し時間的余裕がほしい。（佐藤よし江）

5. 次回の調整員会議のテーマとして、とりあげてほしいテーマがありましたら記入願います。

（影山裕子）

- 1) ローカルコスト負担事業
- 2) 派遣前集合研修におけるレクチャーの内容に対する要望
- 3) 会計の処理方法、フォームについて
- 4) 機材現地調達
- 5) 機材管理

（大原正裕）

- 1) 日常の健康管理法
- 2) 標準会計法
- 3) ODAの発展状況など
- 4) 会計検査院に対する留意事項
- 5) プロジェクト終了時の注意事項

（寺田伸子）

- 1) ローカルコストについて、詳細に時間をかけた勉強会の場がほしい。
- 2) プロジェクト立ち上げ期の調査段階のポイント等、例をあげたものをもっと知りたい。
- 3) プロジェクト終了後も効果的に継続されているような成功したプロジェクトの状況を具体的に取りあげてほしい。
- 4) 各契約書について
- 5) 機材現地調達について

(国森恵子)

- 1) 機材管理(管理台帳など様式、管理方法、相手国側への渡し方)
- 2) プロジェクト終了時における事務処理を具体的に紹介
- 3) セミナー開催(開催方法、支出、準備等、例をあげて)
- 4) 会計処理(望ましい出納簿等)
- 5) 専門家の役割(派遣前研修が重要だと思われる)

(森貞芳子)

- 1) プロ技における専門家の役割について
- 2) 安全対策(事件・事故を未然に防ぐポイントを中心に)
- 3) 機材管理(分科会で)
- 4) 成果品として会計ソフト等、すぐに役立つものの紹介(プロジェクトチームおよびJICA本部)
- 5) 調整員に期待される3つのバランスについて(分科会)
- 6) コンピュータネットワークを利用した事務連絡の迅速さについて(本部・在外事務所・プロジェクトチーム)

(根岸左行)

- 1) 秘書雇用について。契約方法、秘書にさせる業務など
- 2) C/P自主性の向上方法
- 3) 経理について。実務の再確認、新規費用の運用例など
- 4) 成功したプロジェクトの事例研究
- 5) パソコンの通信利用について
- 6) 事務所の役割について

(木田 洋)

- 1) プロジェクト設立前の調査活動のあり方および調査しておくべき事項。
- 2) プロジェクト立ち上がり時の注意すべき点。
- 3) 合同委員会の開催方法(通知、準備資料)および締結すべき文書のフォーム。
- 4) ローカルコスト負担事業のマニュアル、実例紹介。
- 5) JICA本部の動向報告——各部または課別に



(押川雄孝)

- 1) プロジェクト終了時業務
- 2) (狩野課長の話にあった) 3つのバランス
- 3) マスコミと世間の眼
- 4) チーム活性化
- 5) 調整員のリクルート

(原田 徹)

- 1) 現地調達、第三国調達について、そのトレンドとケーススタディー
- 2) 調整員、プロジェクトマネージャー、チームリーダーの役割分担について
- 3) 供与機材の迅速な調達、購送のために調整員が協力できること
- 4) プロジェクトのサステナビリティ促進のための方策について
- 5) 予算項目の内訳とその運用方法

(今村 甲)

- 1) プロジェクト開始期における調整員の業務Q & A集のとりまとめ
- 2) 安全対策費とその実施
- 3) 健康管理法(在外における)
- 4) 調整員になるための資格(人間性、協調性、能力、忍耐…)
- 5) 調整員業務マニュアルの完結編

(伊藤良輔)

- 1) プロ技実施要領(英語・現地語)の作成について
- 2) 他の援助期間の技術協力の実例について
- 3) 研究、普及、開発型等分野別における成功例、失敗例について
- 4) 他の援助機関のプロ技とJICAプロ技の比較について
- 5) 調整員の、国際協力専門員への道等、調整員業務終了後の就職の未知、状況、展望について(本部側から)

(田口正文)

- ・テーマを数多くしないこと!!

(山下哲雄)

- 1) プロジェクトの成功例、失敗例について、具体的に分析を加えながら示してほしい。
- 2) 事前に自分のプロジェクトの問題点、進捗状況をレポートしたものを提出させ、個別会議で議論する。

(大高明夫)

- 1) ローカルスタッフの活用
- 2) C/P研修の意義の見直し
- 3) 会計、文書作成等に使っているコンピュータの一本化とJICAコンピュータとのE-mail等利用による接続
- 4) 事前研修の見直し(安全対策、病気についての知識等)
- 5) 他国の協力事例と、日本のプロジェクト方式の違いの比較

(室井常正)

- ・以下の各テーマのケーススタディー(創造性開発、応用力発揮には効果的)
- 1) 「専門家間の協力関係をうまく作り上げるには」
- 2) 「日本側チームとの板ばさみになってどうしたらよいのか」
- 3) 「JICA方針と相手側要望とどう調和を図るか」
- ・外来講師に進行を依頼してもよいのでは

(清水芳洋)

- 1) プロジェクト評価の指標と方法(中間、最終評価用に)
- 2) 専門家チーム内の問題と対処
- 3) T S I (Tentative Schedule of Implementation) と T D I P (Tentative Detailed Implementation Plan) の関係(部課、プロジェクトによって大きな違いがあるようにみられる)
- 4) プロジェクトの運営体制
- 5) C/P研修(専門家が候補者を選ぶ際の問題点)

(正木幹生)

- 1) 中堅技術者養成対策費、啓蒙普及活動費の実践的活用について
- 2) 日本人専門家と相手国C/Pとの communication technique について
- 3) 会計業務(format etc.)実務の経験交換

- 4) 在外事務所から離れている project の場合の本部、在外事務所との連絡体制
- 5) 年間やプロジェクト期間における調整員業務の整理（いつの時点で、何の書類をどのようにして提出するか他、phase 終了が近い場合、次の step をいかにして進めるか etc.

(井田光泰)

- 1) “Institution Buliding” “Project Management” etc. について具体的ケーススタディー
- 2) PCMのワークショップ。JICA本部を向いた業務内容の講習だけでなく、相手国協力機関等に対するアプローチの方法・ケーススタディーが重要性を増していると考え
- 3) “Technology Transfer” そのものについての議論・講演など(移転すべきものは技術なのか？システム：移転された技術をどう活用するかということではないのか？)
- 4) 国別・地域別、経験・意見交換
- 5) 国際機関、他の国の国際協力（技術協力）の動向

(阿部吉夫)

- 1) 専門家派遣前研修の再考（調整員研修の詳細なる内容を提示）
- 2) プロジェクト運営上の役割分担と調整員の業務
- 3) 会計業務の勉強会（予算執行の実例から、契約業務まで）
- 4) 機材調達勉強会
- 5) プロジェクト開始前に必要な資料の項目の作成（調査員に対する調査マニュアルの作成）

(正崎雄三)

- 1) プロジェクト運営・管理
- 2) 専門家とカウンターパートのあり方
- 3) プロジェクト評価手法
- 4) ケーススタディーを設けて事例研究させる
- 5) 任国側のプロジェクト観

(小笠原壮一)

- 1) 一部、各国で実施している調整員会議の成果の紹介（報告）
- 2) 成功または失敗（？）プロジェクトの立ち上がりから終了までの紹介（特にプロジェクト計画運営）
- 3) プロジェクト評価に当たっての手法
- 4) ベテラン調整員の講演

- 5) プロジェクト運営上の問題点の Case Study (ex. 間違った供与機材、現地環境に溶け込まない専門家、C/Pとうまくいかない、関係組織の改組による対応)

(中野久雄)

- 1) 事例研究「プロジェクトの現況と問題点、将来展望について」
- 2) 現地業務費等の支出事例および支出規定について
- 3) 新しい機材調達制度および新仕様書作成の留意点について
- 4) 事例研究「プロジェクト内における調整員業務について」新人、ベテラン調整員の事例
- 5) 安全対策の事例

(榎 道彦)

- 1) リーダー講演 (テーマは調整員に望むもの)
- 2) 他のプロジェクト視察 (国を越えた同種のプロジェクトの視察)
- 3) ケーススタディー (テーマは1つでよいが分科会形式)
- 4) 新しいローカル負担の運用の仕方
- 5) 何か本部での動き (経理、様式、人材養成、全体の方向、調整員の利用方法等)

(高橋武彦)

- 1) 日本の技術協力方式 (他国との比較で考える)
- 2) 途上国現状分析の方法 (セミナー形式で)
- 3) 本部、事務所とプロジェクトのかかわり
- 4) 1つのプロジェクトを例にとったプロ技協のケーススタディー
- 5) 人材育成とは何か

(松沢和浩)

- 1) 相手側ローカルコスト
- 2) カウンターパートに関する諸問題
- 3) プロジェクトをどう終了に導くか?
- 4) プロジェクトマネジメントにおける調整員の役割
- 5) 相手側をどう自立させるのか?

(宮坂 実)

- 1) リーダーと調整員の役割——リーダーのタイプに、どう合わせるか

- 2) プロジェクトの広報活動を考える—いかに活躍をアピールするか
- 3) 使用可能な予算項目の説明—本部からの説明

(齊藤悦夫)

- 1) 開催地にあるP/Jの訪問
- 2) 調整員業務に関するケーススタディー
- 3) 業務調整員が工夫した one point idea の具体的の披露
- 4) 農林畜水のそれぞれの分野別で、共通するようなテーマを話し合う
- 5) ベテラン調整員の経験談の講演

(島岡みぐさ)

- 1) マスコミの取材を受けた場合の対処方法
- 2) 事務連絡(本部との)の活用方法
- 3) サステナビリティ(毎回話し合ったら良いと思う)特に、機材の維持管理について
- 4) 専門家にとってC/Pとは何か?(先生と生徒なのか)

(鈴木清美)

- 1) 調整員業務の明確化、限定化
- 2) 調整員マニュアルの作成について
- 3) 専門家と調整員の関係について
- 4) 国ごとのプロジェクトの特殊性
- 5) 文書ファイルの方法(具体的)

(小櫃治郎)

- 1) 調整員業務
- 2) リーダー、専門家、調整員の公正な評価とその方法
- 3) リーダーおよび調整員の派遣前同時研修
- 4) 派遣専門家(調整員を含む)語学能力を高めるための国公立機関一般職員への語学補助金の供与等を含む方策
- 5) 派遣前研修の一層の充実

(錦織 明)

- 1) 地域の専門家(つまり、その国ならあの人にまかせろ!)養成は必要か?

- 2) 調整員 (Expert) の雇用 (契約) 条件 (内容) の考察
- 3) 日本社会への真のメッセージ発信の必要性と方法論
- 4) 生活の場として任国をどうとらえるか
- 5) 専門技術 (知識) と、調整員業務の関連

(井手 徹)

- 1) プロジェクト終了時の業務について
- 2) 調整員の確保について――無職参加が多く、任期終了後の処遇について不安
- 3) 研修員受入業務について
- 4) プロジェクト終了時業務について
- 5) 専門家のリクルート方法について

(石山由夫)

- 1) プロジェクト活動範囲で可能な「組織・制度づくり」について
- 2) 調整員の専門性について (技術・語学・事務・開発協力 etc.)
- 3) 調整員にC/Pは必要か
- 4) 本部 (および在外事務所) 担当へ望むこと
- 5) 傭人について (契約書、保険、人数 etc.)

(木村健司)

- 1) 技術移転と語学力
- 2) 相手国側予算の引き出し方
- 3) PCMを使ったプロジェクトの評価法と実例
- 4) 終了後のプロジェクトのその後 (過去の終了後のプロジェクトを追跡調査した結果)
- 5) 非常にうまくいったプロジェクトの実例とケーススタディー

(丸田秀士)

- 1) 精神面の健康管理について (余暇の過ごし方、JICAからの支援事例)
- 2) 治安問題と安全対策
- 3) 任期終了後の問題
- 4) 経理業務の実際と注意点
- 5) 調整員業務の効率化

(佐藤よし江)

- 1) 「調整員マニュアル」の再検討
- 2) 安全対策・緊急時対応について
- 3) 専門家の福利厚生について(本部関係課との意見交換の場) なぜなら「専門家の手引」が非常にわかりにくく、他の専門家に質問されることが多いので
- 4) 精神衛生問題の取り扱いについて
- 5) 調整員のロジ業務の効率化について

6. 会議前の準備連絡・手続き等について意見がありましたら記入願います。

- ・現場に準備連絡があったのが出発直前であり、C/Pとの打合せ、チーム内での整理に時間を要する機材計画書の作成に十分な時間が取れなかった。(寺田伸子)
- ・準備および手続きに関する連絡が他の国に比べ遅いと思われる。(何人かに聞いた結果)  
機材リスト作成依頼は出発日12日ぐらい前に入手。ただし、地方のプロジェクトであるため、少なくとも出発日の前日には北京に出る必要あり。シンガポールの追記に関しても、21日の出発日であるにもかかわらず、18~20日の間で行うようにとの連絡を受けたのが、17日である。よって任地を出る日程がぎりぎりまで立てられなかった。出張旅費の振り込みも他の国より遅かったようである。(国森恵子)
- ・パスポートの追記等の手続きが、直前までできなかったのも、今後は普通の健康管理旅行の時のように、各調整員が各自で手続きをするようにしてほしい。(森貞芳子)
- ・連絡が遅いので不安であった。次回はもっと早く行ってほしい。(根岸左行)
- ・会議での討議内容については、もう少し早く知っておきたかった。
- ・横の連絡(他国の調整員との)ができるくらい、十分な準備時間がほしかった。  
(原田 徹)
- ・地方にいるためなのか、会議備資料のすべてを接受したのが数日前になった。特に全体会議の進行係であるということが分かったのもこの時期であり、発表者との連絡等は不可能。ブツケ本番となり進行がうまくいかなかった(自分の能力上の問題もあることはわかっているが) (今村 甲)
- ・在外事務所担当の方は、いくつもの部のプロジェクトを担当されているため、農林水の調整員会議の詳細について、あまり理解しておられなかったと思う。質問に対して適切な回答が得られなかった。(山下哲雄)
- ・特になし。(大高明夫)
- ・(調整員主体型での実施は)今回初めての試みため、本部もイメージがつかめていなかったのでは。(室井常正)

- ・分科会は今後とも続けた方がよいと思うが、分科内で出発前に進行係、書記に発表文が届く方がよい。 (清水芳洋)
- ・本部と在外事務所がどのような連絡のやり取りをしていたのかわからない(本部から在外事務所の質問に対する回答のFAXは届いたが、在外事務所が本部に何を質問したのかわからない。) —両方の copy を各プロジェクトに送付すべきだ。 (正木幹生)
- ・分科会での役割を明確に伝えてほしい。 (井田光泰)
- ・パスポート手続き(更新、VIZA転記、VIZA取得等)に2週間もかかって、やや閉口した(任期の問題で)。 (阿部吉夫)
- ・役割分担は早目に連絡をとってもらえれば、もっと資料・討議内容の充実が図れると思う。(正崎雄三)
- ・もう少し余裕のある関係書類の送付 (小笠原壮一)
- ・同じ内容の事務連絡が何度も届けられた印象があり、経費の節約、時間の節約を考え、厳選した事務連絡内容にしていただきたい。(中野久雄)
- ・既にご存知のように連絡が遅かった。
- ・成果品をまとめるための準備期間に少々無理があった。(榎 道彦)
- ・会議前の日常業務以外の仕事が多くて、準備連絡ができなかったことが残念だった。(高橋武彦)
- ・テーマ、資料作成に関してはより早期に連絡していただきたい。(松沢和浩)
- ・次回は早目の連絡を期待。
- ・VIZAに関し、渡しはインドネシア事務所経由で本部に問合わせ、結果、VIZA発給をうけた。一方、事前の発給をうけていない国もあった。準備段階で、VIZAの指示もした方がよいのではないか。(宮坂 実)
- ・アンケート、参加者のプロフィールを先に送らせるなど、アイデアは良かった。ただし在外事務所からおくった小生のものはFAXの受信状態が良くないため、判読不明の部分があった。このようなときは連絡いただければ直接に送信することもできた。(齊藤悦夫)
- ・機材供与実施計画を調整員会議で提出するというのを、会議開催の最初のお知らせのときに期に明記してほしかった。
- ・トランジットで、バンコク・シンガポール等に宿泊しなければならない参加者が多かったと思うが、私も、バンコクに到着してその場で自分でホテルの手配をした。トランジットで宿泊する国は、BKK、SNG等に限られていると思うので、ホテルの手配は、本部でしていただいていた方がよいと思う。また、各参加者が自分で手配するのならその旨連絡してほしい。(島岡みぐさ)
- ・連絡が全般的に遅れ気味であり、フィリピンがパスポートの渡航先に入っていないなかったので、



その手続き等にいろいろと日数をとられたところもあった(日常業務上)。 (鈴木清美)

- ・やはり、できるかぎり早目に、連絡をお願いしたい。(錦織 明)
- ・分科会および機材申請書作成等の指示が、Short Notice だった。(井手 徹)
- ・初期の会議開催通知は一度読んで内容が理解できなかった。調整員会議は初めてだが、「連絡が遅かった」の一言である。(石山由夫)
- ・連絡がとくに遅いとは思わない。ノーマルだったと思う。(木村健司)
- ・連絡が遅すぎた(特に機材調達について)「平成8年度供与機材申請書」。(丸田秀士)
- ・まず年度当初くらいに調整員会議の開催時期を連絡してほしい。プロジェクトの年間計画、調整員の一時帰国等の計画が立てられない。
- ・実施要領等についてももっと前広に。(佐藤よし江)

#### 7. その他、調整員会議について意見・要望がありましたら記入願います。

- ・会議についての意見ではなくなるが、プロジェクトが開始された後、多くの調整をしていかなければならない状況になっているが、何ごとにも事前に状況把握、認識を得ておくことが必要である。

①事前調査：相手国の現状を的確に把握できているか。市場経済導入、法律改正等から将来の変化まで予想した形でプロジェクトが始められているのかどうか。相手国が技術協力を行うに当たって、予算確保がきちんとできるかどうか。

②派遣前研修：すべての専門家に「専門家の役割」についてのレクチャーをする必要がある。また調整員の役割も理解してもらう必要がある。中国調整員会議アンケートの結果、社協、医協、鉱工業のプロジェクトでは調整員本来の仕事に専念できているが、農林のいくつかのプロジェクトでは日常通訳で使われたり、プライベートタイムに専門家の家族の買い物の通訳で使われていた。チーム内でバランスを取るために、泣く泣く土、日にも通訳をして生活の面倒を見ている調整員もいる。チーム内では問題がないが、よく他の調整員たちの苦しみを訴えられている。

③人間として良識、弱い立場の者への支援、慈愛の心—これがなくなったところにトラブルが起こっている。現地の人たちは日本人をよく観察している。(影山裕子)

- ・調整員会議の開催について、できれば主催国にあるプロジェクトのチームリーダー代表(2～3名)も参加させて、プロジェクト実施運営などの実例として紹介されることを希望する。(大原正裕)
- ・初めて調整員会議に参加させていただいた。自分のプロジェクトだけでは見えない部分が、このような機会を通じ、他のプロジェクトの状況にも触れることによって分かり、自分のプロジェクトの問題整理、分析になった。今回、現場に持ち帰るべきことは多い。また、任国

の事情により随分状況が異なるので、今後、中国調整員の横のつながりも通し、改善の方向へ進む努力をしたい。（寺田伸子）

- ・今回初めての参加で、私としては非常に得るものが多かった。中国はかなり特殊であるということがわかり（事務所の対応も含めて）同時に反省させられる部分もあった。参加できてよかった。（国森恵子）
- ・可能であれば、在外事務所からも参加してほしい。
- ・中国でもプロ技は20件ほどになった。できるだけ早い時期に調整員会議を北京で開催したい。（森貞芳子）
- ・他国の状況について、情報を得ることができ、非常に有意義であった。事務所からも出席があれば、なおよいと思う。他の事務所の働きぶりなどよく理解してもらえと思う。FAXの普及している現在、在外事務所の役割をもう一度見直す必要があるのではないだろうか？お国柄もあろうが、調整員の希望する在外事務所の役割のアンケートをとってはいかがだろうか。（根岸左行）
- ・JICAフィリピン事務所には大変お世話になった。かつて北京事務所長（当時は中国事務所ではなかった）が、北京でもリーダー会議ないしはアジア地区の調整員会議を任期中に開催したいと述べておられたが、いまだに実現はしていないし、ここ数年は無理だろう。フィリピン事務所のような「ち密」な対応ができないと思うからである。
- ・来年度供与機材についての報告など、毎年更新すべき討議事項もあるので、調整員会議もリーダー会議同様、毎年開く必要があると思う。（木田 洋）
- ・調整員マニュアルには、事例を盛り込んだ別冊がほしい。特にマニュアル化しにくい内容についての豊富な経験談が載っている読本のようなもの。（押川雄孝）
- ・初参加なので大変参考になった。本部からご持参いただいた貴重な資料ありがとうございました。（原田 徹）
- ・東京の事務局の方々はもちろんですが、フィリピン事務所の宿野部氏にも大変感謝いたします。お疲れさまでした。（今村 甲）
- ・今回、当プロジェクトを4人の調整員が訪問し、リーダー、専門家、調整員の間で活発な意見交換が行われ、非常に有意義と思われた。技術交換等では技術専門家が出張し、調整員が出張する機会は少ないので、今後、開催国のプロジェクト訪問は必ず実現してもらいたい。（伊藤良輔）
- ・分科会も、地域、業種（テーマ）等変化を持たせるとよい。
- ・事例研究もテーマ（終了、継続中）の1つにしたらどうか。（田口正文）
- ・地理的な条件もあるが、これまで1年間のごく一部の専門家の中で仕事をしてきたこと、また、赴任して最初の1年間は、事務を動かすことのみで終わっていたために、調整員の仕事

について真剣に考えることも少なかったように思う。今回、この会議に出席したことで、いろいろな考えるヒントをいただいたと思っている。会議の資料、成果品を持ち帰って検討し、業務に役立てたいと思う。 (山下哲雄)

- ・本部ではマッキントッシュを持ってくるということだったが、NECやキャノワードを使っているプロジェクトもあり、できれば、機種をそろえてほしかった。 (大高明夫)
- ・発表方法：説明、プレゼンテーションはビジュアルエイドを使うべし(O. H. P.)。そして、プレゼンテーションは立ってアイコンタクトに留意して話すこと。以上2点は世界の常識、特に調整員の素養の第一歩であると思う。
- ・本部説明についても：誰を対象に何を理解してもらうのか。そして、その内容が聞き手にどのような影響を与えるのか最初に説明する必要あり。つまり、一番最後の「まとめ」の話を一番最初に出していただくとより有効であったのではないか。つまり会議の運営方式のねらい、予算の流れが変わったことによる対応策、機材修理費の意味、現地調達化のねらいなど…感想・講評の部分は別に最後のままでよい。 (室井常正)
- ・JICA統一の文書管理、会議のソフトについて、第1回の調整員会議から要望が出され、その都度検討中、作成中との返事を受けたように思うが、そろそろでき上がってもよいころではないだろうか。 (清水芳洋)
- ・各プロジェクトの紹介パンフレットを持参して交換するなどしたらどうかと思う。
- ・分野別にとどまらず、本部の国別調整員会議を開催できるようにして、在外事務所とも検討してほしい。
- ・はじめて調整員になった人に対する特別研修の設定
- ・毎年 Coordination meeting を開催するようにしてほしい。
- ・開催場所も要検討(街中か resort 地か(缶詰合宿をする)?)
- ・日本以外の先進国の援助機関におけるJICA調整員と同様な post にいる方を招いて、Project Coordination とは?ということをあらゆる角度から検討してはどうか?  
(正木幹生)
- ・なるべく田舎でやってほしい(地方都市)。
- ・せっかくフィリピンに来たのなら、その国の事情(経済・政治発展の現状 etc.)について学ぶ機会があればよいと思う。 (井田光泰)
- ・実証調査プロジェクト調整員(インドネシア・マングローブ)との意見交換ができ、互いのプロジェクトの問題点を指摘し有意義であった(初めて、同系統のプロジェクト調整員と顔を合わせた)。
- ・その他の個人的要望として、JICA本部、事務所から配布される調整員に関する資料の中で、身分(所属)の欄で、私のような所属のない者に「無職」とあるのはやめていただきたい。せめて「なし」と記載してほしい。 (阿部吉夫)

- ・分科会のとらえ方がグループによって違っており、あるグループは詰め込み合宿の風、あるグループは分担（役割）に沿って割り切った対応をしていたように思われた。つまり与えられた役割をもう少し理解しやすい言葉で説明すべきであったろう。（正崎雄三）
- ・本部技管職員の参加の要望：専門家待遇等につきいろいろな問題があると思われる。  
（小笠原壮一）
- ・会議室の冷房のききすぎ体調を崩しそうになった。休憩時のティーサービスはありがたかった。ついでに温度管理についてもホテル担当者に要望してほしかった。軽装でリラックスした会議を目指したが、寒くて軽装になれなかった。（中野久雄）
- ・現地で資料をまとめるなら、それなりの準備が必要である。実際に作業する人の身になって準備をしてほしいし、もし、調整員にそれを望むなら、その旨を明確に事前に知らせてほしい。
- ・本会議はペーパー以外の成果の方が、より大きなものであることを関係者に理解してもらいたい（本音の部分は表には出ないのが普通である）。
- ・国を越えての共通の問題点を確認して安心した部分があった。（榎 道彦）
- ・日々、日常業務、来客への対応等で追われ、今回の調整員会議に挙げられたテーマについては、深く考えたことがなかった。それが、今回のような少人数の分科会形式により、他の調整員から多くのことを学ぶことができたことが一つの収穫だった。本音の部分で話ができないとしたら、会議をこんなに長い日程で開く意味がないので、これからも調整員会議は建前と本音の両方の話ができる雰囲気、やり方を続けてほしい。同じテーマはできるだけ避けるか、あるいは切り口を変えて論議するのが望ましい。（高橋武彦）
- ・分科会にケーススタディー方式を取り入れては？（松沢和浩）
- ・社協のP/J、地方生計向上計画（？）がフィリピンにあり、水産のハタの種苗生産の技術開発を行っている。ハッチェリーは当方のハッチェリーを短期専門家として設計施行管理をやっていた人が、同じようにやったもので、ぜひ見学に行きたかった。ただし1日では行けないので断念した。土・日をはさむ、あるいは土曜に集合し、日曜日に地方のP/J訪問（こられる方は迷惑？）するようなことが可能だろうか？（齊藤悦夫）
- ・分科会のメンバーのうち、2名が欠席であった。なるべく、同じ国からの調整員は分けた方が良いのではないだろうか。
- ・調整員全員の自己紹介は確かに時間がかかるが、大切だと思う（それプラス・プロフィールがあれば良い）。
- ・会議開催中のコピー機、プリンターの使い方の統一（島岡みぐさ）
- ・業務調整を引き継いでから、約1ヵ月。恐らく自分の勉強不足もあろうかと思うが、会議内容について不消化というか、よく理解できない面が（日本語として理解できても）、かなり

あった。(本部出席者による) J I C A 特有の用語のようなものの多用、(また、) 調整員経験の長い人々の発言等の中でも(それは) 同様である。正直、これはどういう意味ですかとか、なかなか聞く雰囲気にならないような気もした。そういう意味で、調整員会議の中でも、初心者コース、中級コース、上級コースというような場面を設ける時間があってもよいのではないだろうか。つまり、経験別、あるいは分野案件別の話し合い等の場が今後必要ではないか。

※それでもいろいろなプロジェクトの調整員の方々と知り合えて、他にも同じ業務でガンバっているという共通認識をもてたことはありがたかった。(鈴木清美)

- ・毎年開いてほしい。2年に一度は、世界中の農林水プロジェクト調整員が出席するものとし、4年に一度は、全世界、全分野の調整員が集まったら面白い。そしてぜひ、各在外事務所担当や、本部担当レベルも出席してほしい。ただし、この会議は、場合によっては、「グチ」の言い合いの場になってしまう可能性もあり、外務省等を納得させるために、会議内容は、さらに詰める必要もある。ひとつのアイデアとして、リーダー会議の内容を調整員会議に取り込んでしまい、リーダー会議は、単なる「顔のつなぎ」の場にするのもいいかと…。リーダー会議に調整員が同行するのも一つの方法かもしれない。各専門分野の Expert についても何らかの一堂につどう場があったらいいと思う。(錦織 明)
- ・毎年開催を望む。他国で活動中の調整員の方々から多くの事例、情報を聞いたり、本部代表者から直接意見が聞ける場合は、この機会しかなく、ぜひ毎年開催を望む。(井手 徹)
- ・名札がおそまつで、付けている人がなく、交流が制限(自分で制限してしまった)された。
- ・記録者はプロを雇用して、会議の記録を翌朝、あるいは開催国出発前に配布してほしい。
- ・他の4事業の調整員会議、リーダー会議の内容が知りたい。
- ・調整員会議を毎年開催してほしい。(石山由夫)
- ・ちょっと人数が多すぎたように思う(もう少し細かく、国情の似た国々に分けて、小人数で行えたら良いと思う)。(木村健司)
- ・ケーススタディー的な分科会も有効。
- ・J I C A 本部が知りたいことを会議のテーマに上げるのではなく、各調整員が持っている問題点を本部担当が日ごろから収集しておいて、それをテーマとするのが良い。

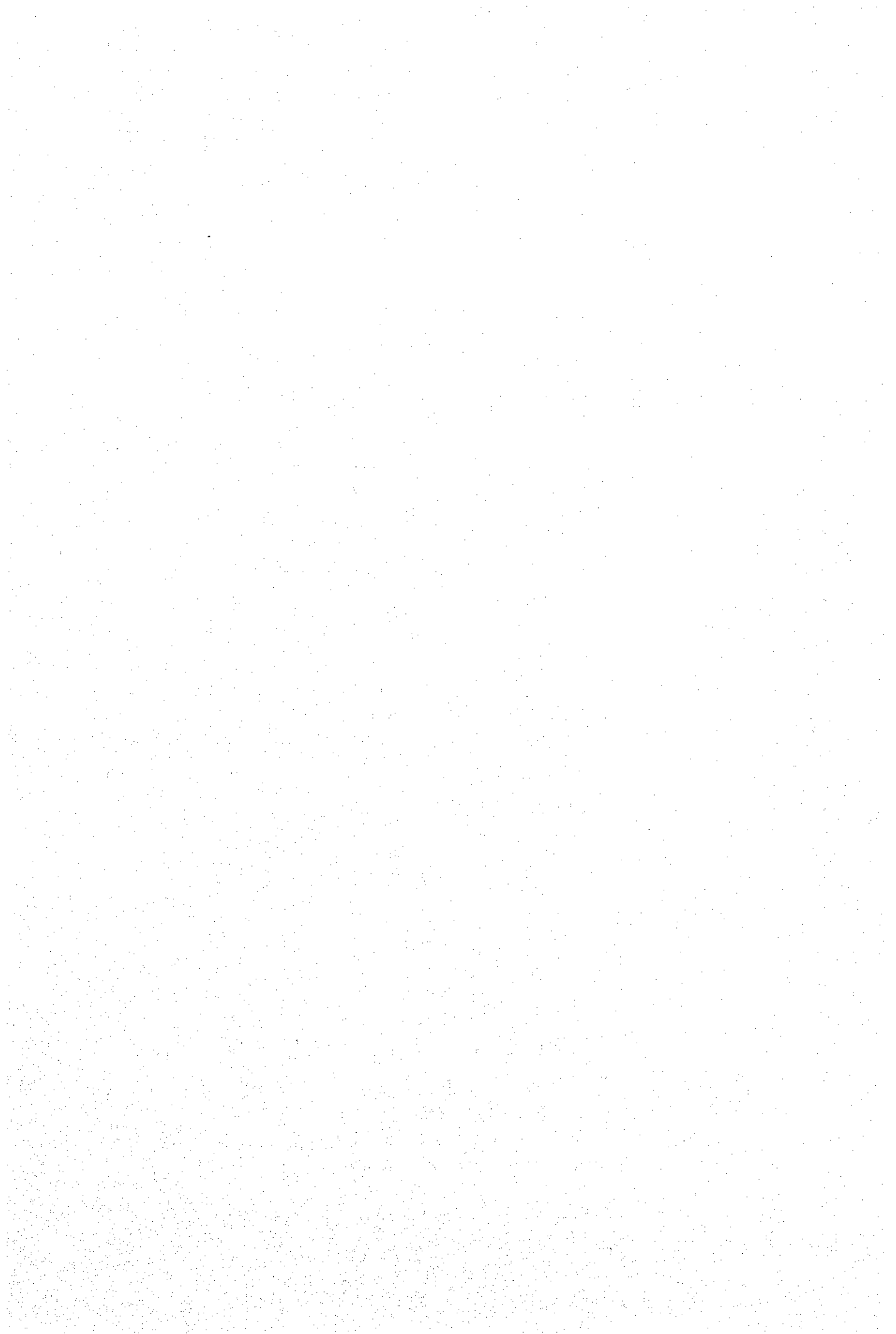
(丸田秀士)











JICA